

視により、本症の診断を得て、緊急手術施行となった。開腹すると輸入脚は癒着により閉塞、拡張、捻転し、穿孔を伴っていた。輸入脚空腸を切除、再建は Roux-en-Y 吻合とした。術後 62 日目、軽快退院となった。

今回、我々は胃切除後 23 年を経て発症した acute afferent loop obstruction を経験したので、若干の文献的考察を加えて報告する。

#### 同時性および異時性大腸多発癌に皮膚癌を重複した遺伝性非ポリポーシス大腸癌の 1 例

(赤羽中央病院外科) 高柳泰宏・佐藤浩之

今回、我々が経験した遺伝性非ポリポーシス大腸癌 (HNPCC: hereditary non-polyposis colorectal cancer) と考えられる 1 例を報告する。

症例は 54 歳男性で、家族歴として父と同胞、2 名が大腸癌であった。平成 6 年 11 月、上行結腸癌穿孔で緊急開腹となり右半結腸切除を施行した。平成 7 年 9 月、径 2 cm の下腹部皮膚腫瘍を切除し、病理組織検索で扁平上皮癌であった。平成 9 年 1 月、2' 横行結腸癌を認め、横行結腸切除を施行し、平成 9 年 6 月、2' 直腸癌を認め、大腸全摘回腸直腸吻合を施行した。平成 10 年 5 月、残存直腸の歯状線口側に直腸癌を認め、経肛門的局所切除術を施行した。標本の遺伝子検索で HNPCC の原因遺伝子の一つと考えられている hMLH1 が同定された。本症例は第 1 度近親者に発端者を含む 3 例の大腸癌患者を認め、HNPCC の本邦診断基準に合致していた。さらに初回開腹から 3 年 6 カ月の間に 3 回の異時性多発を認め、異時性に皮膚癌を重複していた。

HNPCC では転移再発例が少なく、予後は良い場合が多いとされている。家族歴および臨床経過から HNPCC と考えられる症例では、遺伝子検索を含めた厳重な経過観察と、転移再発のない異時性多発を認めた段階での大腸全摘を考慮する必要があると思われる。

#### 人工肛門造設術後に大量出血にて発症した上行結腸動静脈奇形の 1 症例

(谷津保健病院外科) 鬼澤俊輔・河 喜鉄・森山 宣・宮崎正二郎・藤田 徹・平山芳文・糟谷 忍・御子柴幸男

腸閉塞合併下行結腸癌の診断で人工肛門造設術施行後、人工肛門からの大量出血で発症した上行結腸動静脈奇形の 1 例を経験したので若干の文献的考察を加えて報告する。

症例は 73 歳男性で、平成 10 年 2 月 19 日腸閉塞で他

医より紹介入院した。注腸造影検査で下行結腸癌と診断し、2 月 20 日横行結腸に人工肛門造設術を施行した。術後、腸閉塞症状は改善したが、2 月 23 日人工肛門よりの大量出血を認め、大腸内視鏡検査で Bauhin 弁より約 10 cm 肛側の上行結腸に拍動性出血を認めた。潰瘍、腫瘍等はみられなかった。腹部血管造影検査では同部位に造影剤の漏出を認め、血管像から動静脈奇形と診断した。同日緊急で右結腸切除術を施行した。病理組織学的検査で動静脈奇形と診断された。その後出血は認めず、3 月 18 日下行結腸癌に対して根治術を施行し、以後の経過は良好である。

#### 潰瘍性大腸炎に合併し、遷延した経過をとった A 型肝炎の 1 例

(至誠会第二病院消化器内科)

小川美穂・足立ヒトミ・星野容子・宮崎英史・根本行仁

症例は 33 歳男性で、平成 8 年 1 月より潰瘍性大腸炎 (UC) で当院通院中であった。平成 10 年 8 月中旬全身倦怠感・食欲低下が出現し、T-bil 3.1 mg/dl, AST 1,990 IU/l, ALT 2,784 IU/l と肝障害を認め入院となった。IgM-HA 抗体陽性、HBs 抗原・HCV-RNA 陰性より A 型肝炎と診断した。安静・補液で約 3 週間で AST 37 IU/l, ALT 55 IU/l と改善し退院したが、約 1 カ月後、AST 353 IU/l, ALT 671 IU/l と再び上昇を認め再入院した。自己抗体・HBs 抗原・HCV-RNA 陰性より A 型肝炎再燃と考えられた。発症後約 5 カ月経過した現在も AST 55 IU/l, ALT 86 IU/l と肝障害の遷延を認めている。

A 型肝炎の遷延化・重症化を来す原因として種々の推察がなされている。本症例では、潰瘍性大腸炎の存在が何らかの影響を及ぼした可能性も考えられた。

#### C 型慢性肝炎に対する IFN 療法中に癌性心膜炎 (乳癌術後再発) を発症した 1 例

(国立横浜病院臨床研究部, \*外科)

塚田百合子・福田祥子・飯塚雄介・加藤純子・関谷仁美・磯野悦子・松島昭三・小松達司・青崎正彦・高橋 陽・三木 亮・土井卓子\*・大滝修司\*・西山 潔\*

症例は 51 歳女性で、主訴は全身倦怠感、呼吸困難、動悸である。1997 年 11 月 14 日、右乳癌 (t2 n0 m0 Stage II) 治療手術施行時に肝機能障害を初めて指摘された。HCV 定量 26 k コピー/ml, グルーピング 2, 肝生検では慢性活動性肝炎 (F 3/A 2) であった。1998 年

3月30日よりIFN $\alpha$ の投与を開始し終了直前に主訴が出現し入院となった。臨床所見、検査所見より、癌性心膜炎（乳癌術後再発）と診断した。

本症例は乳癌の絶対的治癒手術から約10カ月で再発しており、IFN療法が早期再発に何らかの関与をしている可能性もあると考えられる。

### 長期間のステロイド治療が必要であった薬剤性肝障害と思われる1例

（至誠会第二病院消化器内科）

星野容子・足立ヒトミ・小川美穂・  
宮崎英史・根本行仁・黒川きみえ

症例は67歳の男性で、1997年9月下旬より、感冒様症状が出現し、市販のスーフンB錠を内服し軽快した。10月初旬より39度の発熱、全身倦怠感、黄疸を認め、当科を受診した。肝胆道系酵素およびCRPの上昇を認め、入院となった。入院後の39度の稽留熱があり、胆道感染症を疑い、各種抗生剤を投与したが、症状は軽快しなかった。薬物服用後の肝機能障害および、発熱、黄疸という臨床症状より、薬剤性の肝障害を疑いソルメドロール40mg投与し、症状の劇的な改善および、肝胆道系酵素の低下が認められた。LSTは陰性であったが、スーフンB錠が原因となった薬剤性肝障害（疑診）と考えられた。

本症例ではステロイド投与が有効であったが、経過中ステロイドの減量で、発熱、検査所見の増悪が認められた。発症より1年3カ月、現在もプレドニン5mgを投与中であり、薬剤性肝障害には非常に稀な経過と考えられ、今後も慎重な観察が必要と思われた。

### 当科における肝細胞癌に対する経皮的マイクロ波凝固療法の治療成績

（社会保険山梨病院内科）

春山航一・細田和彦・飯田龍一

〔はじめに〕1996年8月より、肝細胞癌（HCC）に対する集学的治療の一つとして経皮的マイクロ波凝固療法（PMCT）を導入し15例に施行したので、治療成績について報告する。

〔対象〕HCCは35結節、高分化27、中分化7、低分化1結節であった。

〔方法〕局麻下ともにエコーガイド下に14G誘導針を介し深部凝固用電極針で1回60W、60秒とし数回照射、凝固した。

〔結果〕局所再発は、35結節中1結節で、局所再発率は2.9%と局所制御能は良好であった。他部位再発は、4例、13結節にみられた。合併症は、発熱が8例、右

胸水1例、腹腔内出血1例でいずれも対症療法で軽快した。

〔結語〕治療成績は良好であり、合併症も重篤なことはなく、有効な治療と考えられた。

### 長期経過観察により明瞭化した高分化型肝細胞癌の1切除例

（国立横浜病院臨床研究部，<sup>1</sup>東京女子医大消化器病センター外科，<sup>2</sup>内科）

福田祥子・塚田百合子・平田真理・  
飯塚雄介・加藤純子・関谷仁美・  
磯野悦子・松島昭三・小松達司・  
三木 亮・羽鳥 隆<sup>1</sup>・  
高崎 健<sup>1</sup>・斎藤明子<sup>2</sup>

症例は74歳男性で、1991年に肝障害で当科を初診し、C型慢性肝炎と診断された。1993年に腹部超音波検査で肝S8に $\phi$ 6mmの高エコーのSOLを認め、経過中に徐々に増大し、1998年7月腫瘍は中心部の低エコー域の拡大を伴う $\phi$ 22mmとなり、肝細胞癌と診断した。8月肝S8切除術を施行した。

本症例は腫瘍の発育が緩徐であり、5年6カ月という長期の過程をエコーで経時的にとらえることができた貴重な高分化型肝細胞癌症例である。

### 乳頭部に再発した胆管内発育型肝細胞癌の1例

（県央胃腸病院，<sup>1</sup>東京女子医大消化器

外科，<sup>2</sup>都立荏原病院） 木暮道夫・  
藤本 章・宮内倉之助・林 俊之・  
今泉俊秀<sup>1</sup>・高崎 健<sup>1</sup>・吉川達也<sup>2</sup>

81歳の女性で、胆管内発育型のHCCに対し左葉切除術が行われた。術後1年目に画像診断上、傍乳頭憩室内に腫瘍を認めたが、精査中に腫瘍が消失したため経過観察した。1年半後にanemiaが出現し、腫瘍が増大し、AFPが1,200に上昇した。CT、angiography、MRIで傍乳頭憩室内十二指腸腫瘍の診断でPpPDを施行した。十二指腸憩室の口側端に乳頭があり、その口側に3.5×2.5cmのきのこ雲状の有茎性の腫瘍がみられた。ミクロでは腫瘍はmoderately diff.HCCで、前回のHCCの像に類似していた。

HCCの乳頭転移例は文献検索上報告がなく、きわめてまれな1例と考えた。

### 肝細胞癌の経過観察中に歯肉腫瘍を認めた1例

（森下記念病院，\*東京女子医大消化器病

センター） 中上哲雄・  
森下 薫・渡辺龍彦・西山隆明・  
山田葉子・高崎 健\*・斎藤明子\*